なります。

トラックで運ばれてきた筒は長さ4㍍、重量2.5㌧の鉄製。この筒をクレーン車でゆっくりと吊り上げ、基礎を越えて畳の中央に慎重に設置します。この後、作業用の足場をつくるため、筒を取り囲むように数本の鉄パイプを交差させて基礎に固定し組み上げました。

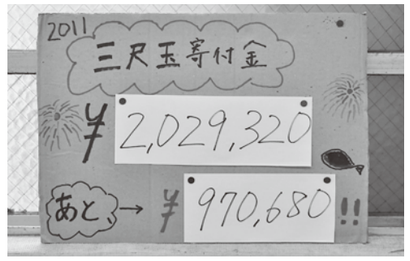
続いて筒に火薬を仕込む作業ですが、これが危険を伴うため気が抜けません。火薬袋を持った花火師の古閑潔さんがクレーン車に吊るされて筒の中へとゆっくり入っていきます。静電気や摩擦による火薬への引火を避けるため、クレーン車の可動部分にはタオルが巻かれ、安全を徹底した作業が進められます。この作業が終わりようやく三尺玉の設置となります。木箱に入ってトラックで運ばれてきた三尺玉はクレーン車に吊るされ大切にゆっくりと筒の中に設置されました。

▲市内の施設や店舗に置かれた三尺玉募金箱

みんなの願いが届く風が弱まる

8月7日、打ち上げ当日になっても風が弱まる気配はありませんでした。しかし、現場責任者の古閑毅さんは夕方には風が弱まると確信していたようで、平然とした様子で作業を進めていました。古閑さんは、本市に事務所を置く花火会社「六葉煙火」で働いています。父の修一さん、弟の潔さんらとともに花火の製造をはじめ、県内外での打ち上げに数多く携わっています。また、熊本県八代市で行われる花火師の腕を競う九州最大のコンテストでは現在2連覇中で、広くその名を轟かせています。

三尺玉花火以外の花火は漁港西側の外港で上げられます。当日の東堤防への移動は祭り会場周辺の渋滞を避けるため小型船を使います。午後3時過ぎ、最後の準備となる三玉からスイッチへの配線を渡るため、スタッフ2人が東防に渡りました。約1時間作業を終えて外港に戻ってたころには風はだいぶ弱まっていました。そして午後5過ぎにようやく打ち上げの定が出されました。薄暗くってきた午後7時過ぎ、三玉打ち上げのためスタッフ人が小型船に乗り東堤防にりました。



▲きばらん海事務局に掲げられていた寄付金額を記載した手作りパネル

確立5割のスイッチ

古閑毅さんは「成功確立割」と言っていました。この確立の低さを聞いて驚きましたが、一般的に三尺玉の成功しの5

INTERVIEW①

きばらん海実行委員長
市田芳一 さん

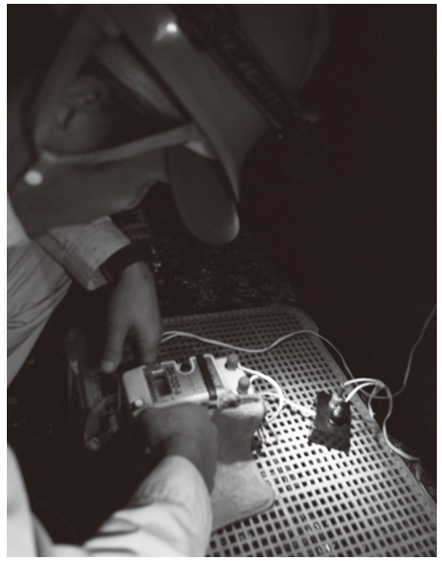
「枕崎で三尺玉を上げよう」このきっかけになったのは、世界一を誇る新潟県片貝町の四尺玉花火を見たときです。この四尺玉が町民協賛で打ち上がると聞き、住民の想いが込められた輝きに感動しました。

新潟から戻り早速準備を始めたものの、場所の選定や設置方法の問題などに直面し1年目は苦労の連続で、祭り関係者の中でも本当に上げられるのかと心配していた人もいました。しかし、たくさんの方々からの寄付、そして支えがあり打ち上げることができました。そのとき感じた一体感は今でも忘れられません。

4回目の打ち上げとなった今回は「市民一丸となって三尺玉を上げるということに大きな意味を感じる」というような声も多く寄せられています。これからも市民一丸の証として、そして市民の心意気を示すシンボルとして次世代へつなげていければと思います。

確率は8割と言われているらしく、今回は強風のため堤防を越えて吹き上げる潮風を筒や配線などがかぶっていることを考えるとこのくらいの確率だといいます。

午後8時50分に三尺玉以外の花火が終わり、いよいよ打ち上げの時間が近づいてきました。打ち上げのスイッチを押す最前線のスタッフは安全のため250㍍ほど離れた場所にある段差の壁に隠れるようにしゃがみ、盾を傍らに置きヘッドライトでスイッチを照らし発射までのシミュレーションを繰り返します。「三尺玉打ち上げてください」と無線が入ると魚市場のサイレンが打ち上げ開始の合図を町中に知らせました。1回目のスイッチで打ち上げを予告する音花火が「パパパン」と鳴り、間を置きもう一度押すと「ドスッ」という太く乾いた音が鳴り響き、筒からは20㍍を優に超える火柱が上がりました。上空でもう一度大きな音が響くと、周りが明るく照らされ、光の筋が降りそそいできました。



▲打ち上げ直前。スイッチを前に最終確認をする

打ち上げから閃光が消えるまでおよそ30秒。緊張から解放される瞬間でした。再び無線から「最高でした。おつかれさま」の声が流れたのを聞きスタッフ二人は安堵した表情で微笑み、握手を交わし成功を祝しました。

取材を終えて

今回の取材をとおして、尺玉を打ち上げるまでに様々な苦労があることを知ました。そして打ち上げにわった人たちからは、一人とりの想いの詰まった三尺を上げることへの強い使命と誇りを感じました。

今回で21回目の開催となた「さつま黒潮『きばらん海』枕崎港まつり」。その身である「港まつり」の歴は古く、1951年に枕崎漁業協同組合の主催で大漁航海安全を祈願する祭りとて始まりました。この流れ受け継いだ「きばらん海」近年、南薩摩最大の夏祭りして毎年10万人を超える来者でにぎわう本市の一大イントに発展しました。

昔から祭りは市民の身近ある楽しみです。そこには人ひとりが携わり、一滴の汗を流す姿があります。市民一心意気で打ち上げられる「尺玉花火」の輝きは明るい未来を照らす道しるべのようにも見えました。

INTERVIEW②

花火師
古閑 毅 さん

県内各地の花火大会を回っていますが、三尺玉が上げられるのは地理的条件など考えても枕崎だけかもしれません。花火師としては玉が大きくなればなるほど特別なものを感じます。生まれ育った枕崎で九州で唯一となる三尺玉の打ち上げに携われることに運命を感じています。

花火には昔から奉納の意味合いが強くあります。市民の寄付金(奉納金)で上げる三尺玉を預かる身としてプレッシャーはありますが、どんなに汗にまみれて汚れてもいいから確実に上げることだけを考えて臨んでいます。これから先も誇りを持ってやり遂げたいです。

三尺玉が無事上がったあと、ほっとしているところに殻の破片が頭(ヘルメット)に落ちてきました。周りにスタッフも結構いましたが、私だけでした。昔から花火の殻は魔よけ(お守り)になるといわれている縁起物です。これもまた何かの縁だと思っています。

みんなのつぶやき

「きばらん海」や「三尺玉花火」に関するツイッターでのつぶやきを引用して紹介します。

▶きばらん海事務局です。三尺玉寄付金、280万円突破しました!!あともう少し、きばらん海までラストスパートです☆頑張りますp(^_^)q ▶いよいよ来週に迫ってきましたよ！きばらん海！台風はきません！だから、やってやるぞ！▶きばらん海事務局です。三尺玉寄付金、300万円達成しましたー↗☆☆(^_^)皆さんのご協力ありがとうございました！ ▶三尺玉の花火、WE LOVE MAKURAZAKI 一滴の汗！頑張れ～♪ ▶花火上がるの？？風がだいぶ強いけど… ▶きばらん海事務局です。風の強い中、がんばってまつりを進めております(>_<)早く台風が通り過ぎてくれればいいのですが・・・ ▶いよいよ始まりました花火大会 ▶三尺玉上がるか ▶ドデカイ三尺玉、たまや～！ ▶三尺玉最高!(^^)! ▶まつり最大の目玉！三尺玉花火も無事打ち上がりました♪(´▽`)／